

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：72622

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520726

研究課題名（和文） 近代トルコの地方名士—マニサ地方を中心に—

研究課題名（英文） Local Gentry in Modern Turkey: The Case of Manisa District

研究代表者

永田 雄三（NAGATA YUZO）

財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：20014508

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、タンズィマート改革による政治的変革と国際貿易の拡大による経済的変化という両面からもたらされる地域社会の変容の諸相を具体的に描き出そうとするものである。とりわけ、マニサ地方のアーヤーン家系であるカラオスマンオウル家の状況を、改革のプログラムの一環として、1845年に中央政府によって都市民と農民とを対象に実施された「収入台帳」の分析を通じて明らかにしたものである。地域住民の中には、ムスリムと非ムスリムとを問わず、地域の産物に対して増大する外国からの需要にしだいに敏感に反応して上昇する新しい社会層が形成されつつあった。その結果、カラオスマンオウル家は、なお一定の影響力を維持しつつも、かつて保持していた大きな影響力を次第に相対化されつつあった。

研究成果の概要（英文）：

The aim of the present research is to describe the real situation of regional society which was undergoing change both politically under Tanzimat and economically in the midst of foreign trade expansion. The research describes in particular the circumstances of one particular *ayan* family of the Manisa region – the Karaosmanoğlu family – through the prism of a document called the *Temettuat Defters* ('Income Registers') that was compiled on the basis of income surveys conducted by the central government in 1845 among the urban and rural residents as part of its reform programs. The region's population, Muslim and non-Muslim alike, was becoming more and more sensitive to the rising foreign demand for its products. New social strata were being formed through the wealth provided by the expansion of trade, resulting in a neutralization, or relativization of the great influence that had been wielded by the Karaosmanoğlu Family on the local level.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：トルコ、マニサ、アーヤーン、カラオスマンオウル家、近代

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀から19世紀にかけて勃興したオスマン帝国の地方名士アーヤーンの研究は、近現代の中東・バルカンの社会および歴史を理解するための基礎作業である。

(2) アーヤーンに関する従来の研究によれば、かれらの富と権力の基盤は、地方官職と不可分に結びついた徴税請負制に求められている。

(3) このため、アーヤーン層は、19世紀初頭における開明的専制君主マフムト2世（在位1808-39）による強引な中央集権化政策によって弾圧をうけて没落したと理解されてきた。

(4) しかし、本研究代表者は、従来の見解を全面的に否定し、かれらは、つづくタンズィマート改革（1839-76）においてもなお一定程度の影響力を保持して改革の行方に大きな影響力を行使したと考えている。さらに、かれらの一部は現代においても、かれらの影響力の基盤である地域社会においてもある程度の影響力を保持している。その論拠は、アーヤーンの富と権力の基盤は、徴税請負制だけではなく、チフトリキと呼ばれる大農場経営とイスラムに特有なワクフと呼ばれる宗教的寄進制度を通じて行われた富の地域社会への還元という社会的な行為をも加えた、複合的で強固な基盤であったというものである。

(5) 本研究代表者のこの主張は、すでに1997年にトルコ語によって、トルコ歴史協会から出版された『歴史の中のアーヤーン：カラオスマンオウル家の研究』によって国際的に発信されている。さらに、その後得られた新資料を加えて『前近代トルコの地方名士』（刀水書房、2009年）によって国内にも発信されている。

## 2. 研究の目的

本研究は、以上の研究成果を踏まえて、19世紀中葉、すなわちタンズィマート改革期の真ただ中におけるアーヤーンの地域社会における状況を、地域住民全体の状況の中において、より具体的に明らかにし、従来の研究に対する批判点をさらに明確にしようとするものである。

## 3. 研究の方法

(1) トルコ共和国イスタンブールに存在する「首相府オスマン文書局」の所蔵する『収入台帳』文書として知られている一連の文書のうち、1845年3月に行われたマニサ県マニサ郡の都市民・農民（ムスリム・非ムスリム）

約3万人を対象とした調査結果（台帳）66冊すべてを分析し、住民が当該年度に得ている全収入を把握した。

(2) この文書からは1845年という時点における状況しかわからないため、マニサ郡の行政の中心である「イスラム法廷」の記録文書を併用することによって、住民たちの資産状況を動態的に掌握することに努めた。かつ、同法廷に中央政府から送付された勅令文書、住民の遺産目録、税制の改革などの資料によって、マニサ郡が置かれた国際的な地政学上の位置づけを明確にした。

## 4. 研究成果

(1) マニサ地方随一のアーヤーンであったカラオスマンオウル家は、1845年の調査が行われた時点で、マニサ県知事を務めており、政治権力をなお保持していたことがまず確認された。

(2) カラオスマンオウル家の富と権力の一端をなしていた徴税請負権に関しては、タンズィマート改革によって徴税請負制が部分的に廃止され、かつ中央の強い監視下におかれたため、同家の富と権力の基盤とはもはやなりえないことが判明した。

(3) ワクフ制度もこのころになると、国家の監督下に置かれるようになったため、同家の一員によるワクフ行為は行われることはなくなった。ただし、これ以前の時期に行われた同家の成員によるワクフ施設（モスク、学校、水飲み場、図書館、橋、道路）は存在しており、これらの施設の維持費として寄進された店舗、住宅、隊商宿、ハمامなどの財源はなお機能しているため、ワクフ制度はアーヤーンの社会的評価を持続させる機能を果たし続けた。

(4) 1845年の時点でも同家はなお多くのチフトリキを所有・経営していた。したがって、同家はマフムト2世の弾圧によって打撃を受けたにもかかわらず、なお土地所有を通じてマニサ地方随一のアーヤーンとしての勢力を維持していた。

(5) 一方では、タバコ、アカネ、綿花などの商品作物に対するヨーロッパ諸国からの需要の拡大に敏感に反応するムスリム・非ムスリム住民の台頭も見られた。カラオスマンオウル家もこうした状況に対応していたが、時代状況に即した新たな社会層の台頭によって、同家の在地社会における影響力はしだいに相対化されつつあった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① Yuzo Nagata, XIX. Yüzyıl Ortalarında Manisa Kazası ve Karaosmanoğulları, *Özer Ergenç'e Armağanı* (トルコ語、印刷中)
- ② 永田 雄三「知の先達に聞く (6) 永田雄三先生をお迎えして—わたしのトルコ研究を振り返って—」『イスラーム世界研究』6、2013年3月、195-230頁、査読無
- ③ Hikari Egawa, The Importance of Inter-disciplinary Research Connecting Historical, Anthropological, Information, and Engineering Sciences of Based on the Case Study of Spatial-Temporal GIS (DiMSIS-EX) Application,” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*, 6, 2013, pp. 59–64, 査読有.
- ④ Hikari EGAWA & İlhan ŞAHİN, Residents and Society of the Düzce Region in the first half of the 19th Century, *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*, 6, 2013, pp. 65–76, 査読有.
- ⑤ NAGATA Yuzo, Local Gentry in Mid-19<sup>th</sup> Century Turkey: The Case of the Karaosmanoğlu Family of Manisa, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 70号, 2012, pp. 47–77, 査読有.
- ⑥ 永田 雄三「トルコのことわざと歴史教育」『教育とことわざ』、2012年、82-94頁、査読無
- ⑦ 江川 ひかり「遊牧民女性の技と記憶：西北アナトリア、ヤージュ・ベディルの人びととの交流から」『立命館言語文化研究』23巻1号、2011年、127-139頁、査読有
- ⑧ EGAWA Hikari, Book Review: Yuzo Nagata *Provincial Notables in Premodern Turkey: A Case Study of the Karaosmanoğlu Family*, 『日本中東学会年報』27-1, 2011, pp. 331–344, 査読有.
- ⑨ 永田 雄三「バルカン諸国の歴史—オスマン帝国の遺したもの—」『Civil Engineering Consultant』250、2011年、12-17頁、査読無

⑩ 吉田 達矢「1840年代における東方正教徒「共同体」運営構造へのオスマン帝国の政策：ロゴフェト問題を中心に」『アジア文化研究所研究年報』45、2011年、62-72頁、査読有

⑪ 江川 ひかり「徴税請負制度に立ち向かう遊牧民—西北アナトリア、ヤージュ・ベディルの事例から—」『歴史と地理：世界史の研究』224、2010年、1-15頁、査読無

⑫ 江川 ひかり「19世紀中葉西北アナトリア、バルケスイル地域における遊牧民の経済状況—1840年『資産台帳』の分析を中心に—」『駿台史学』142、2010年、25-57頁、査読無

[学会発表] (計 3 件)

① Hikari EGAWA & İlhan ŞAHİN, “Residents and Society of the Düzce Region in the first half of the 19th Century,” 20<sup>th</sup> Symposium of the International Committee for Pre-Ottoman and Ottoman Studies (CIÉPO), Rethymno, Greece, 27 June, 2012.

② 江川 ひかり「トルコ共和国ドゥズジェ市の形成過程：被災地復興のための学際的研究における歴史学の意義」、2011年度駿台史学会大会シンポジウム「20世紀にみる地震災害と復興」、2011年12月3日、明治大学

③ Hikari EGAWA, “Pazar Yerinden Kasaba'ya: Düzce'nin Doğuşu,” 19<sup>th</sup> Symposium of the International Committee for Pre-Ottoman and Ottoman Studies (CIÉPO), Van, Turkey, 30 July, 2010.

[図書] (計 3 件)

① 永田雄三「写本研究の愉しみ (2) オスマン朝」小杉泰・林佳世子 (編著)『イスラーム 書物の歴史』名古屋大学出版会 (印刷中)

② 大村幸弘・内藤正典・永田雄三 (編著)『トルコを知るための53章』明石書店、2012年4月、364頁

③ Masatake MATSUBARA 著, Kiyotaka Sugihara 訳, Hikari EGAWA/ İlhan ŞAHİN 監修, *Göçebeliğin Dünyası: Türk Göçebelerinden Çoşlu*

*Yörüklerinin Etnografyası* (松原正毅著  
『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルック  
の民族誌から』), Atatürk Kültür  
Merkezi, Ankara, 2012.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田 雄三 (NAGATA YUZU)  
財団法人東洋文庫・研究部・研究員  
研究者番号：20014508

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

江川 ひかり (EGAWA HIKARI)  
財団法人東洋文庫・研究部・研究員  
研究者番号：70319490

吉田 達矢 (YOSHIDA TATSUYA)  
名古屋学院大学・経済学部・専任講師  
研究者番号：10409443